



2014

その頃の大野町

00NOSTALGIE

コールドターの黒が匂う。

常滑市の北端にある大野町は、ものの20分もあれば端から端まで歩いてしまうほどの小さな町である。伊勢湾に接しており、潮の香りが濃厚な町並みは、潮風から建物を守るために塗られたコールドターの黒が似合う。

その昔、この町は相当なぎわいを見せていた。古くより醸造や廻船、鍛冶、木綿製造などが盛んで、江戸時代には知多半島屈指の港町として栄えたという。近代に入ってもその繁盛ぶりは続いてい

たようで、近隣の人が集まる繁華

街としてその名を轟かせていた。

特ににぎわったのは夏であった。

地元で「世界最古」と伝えられて

いる海水浴場には、名鉄電車に乗

つてどこかどかと海水浴客が訪れた

(大正の頃までは、レジャーとい

うより、病気を平癒する潮湯治の

意味合いを持ちあわせていた)。

名古屋方面から保養目的にちよう

ど良い距離であったのであろう。

瑠璃が浜(るりがはま)は人で埋

め尽くされ、今からすると想像が

付きにくいのだが、芸者を抱える

料理屋やキャバレーみたいなカフ
エー、さらには芝居小屋、映画上
映館、パチンコ屋などが点在して
いるようなちよっと猥雑でハイカ
ラな町であつたらしいのである。

丸共とカメルハウス。

僕が子ども頃の頃は、そんなピ
カピカで豪華な町であつたという
記憶はない。が、今思い出せば、そ
の名残はあつたと思う。時代は、
高度成長期真っ只中。海は深緑色
に汚れていたにもかかわらず、夏
になると、海水浴客でそれなりに

賑わつた。我が家では、「丸共」

の名で、複数家族での共同運営に

よる夏の時期だけ姿をあらわす臨

時の休憩所を営んでいた。板べり

にご座を敷いた簡易なもので、海

水浴客に対し、シャワーと更衣室

といった施設とともに、味噌おで

んやラーメンなどを提供した。子

どもの頃の夏休みの光景は、印象

深いものであるらしい。休憩所のご

座敷きを手伝ったり、観光協会が

催したラッキーボール投げという

イベントが休みの日などにはあつ

て、賞品目当てに必死でボールを

追いかけてたりしたことが鮮明に思

い出される。

誰もがみんな同じものを欲しが

つた高度成長期から成熟期に移ろ

うとしていた頃であろうか、この

海にウィンドサーフィンが姿を現

した。湘南の風が、知多半島にも

カメルハウスの記憶

今は大野町で町おこしの活動に携わっている、弟の同年の後藤信之くんがカメルハウスの記憶を尋ねてみた。この店で、弟らとともにアルバイトをしていたのだ。

刺激の少ない町に、都会の匂いがする先端の店がやってきたのだから、憧れるようにそれに飛び付いた。今思えば、若かったというしかない。カメルハウスが営業していた

のはほんの数年間で、真夏の打上げ花火のように消えてしまった。この辺りにある店にしては本格的だったから、経営的には厳しかったのか、それとも、時代が追い付いていなかったということなのかもしれない。



吹きはじめたのである。当時、この流れの中心的な役割を担っていたスポーツがあった。カフェバーの「カーメルハウス」である。純喫茶やスナックしか存在しなかったこの辺りに、突如現れたカフェバーという新たな飲食文化。海を見渡せるセンスの良い店内には、当時流行っていたコンテンツポラリ―ミュージックが流れ、フレンチ風の料理や不思議な名前のカクテルが提供された。人とは違う楽しみを求めた若者にとって、この空間は刺激的であったようで、またたく間にウインドサーファーの溜まり場になった。

健全なにぎわいがあった。

その頃のその町は、繁華街という程でもなかったが、歩いていけるところに生活必需品を取り扱う

客さんが泊まりに来るかわからないが、旅館も何軒があったし、すし屋をはじめとする飲食店も相当な数があった。常滑市内で名鉄電車の特急が停車するのも、この町の駅と終点の常滑駅だけだった。子どもの頃は当たり前だと思っていたこうした事実も、昔栄えていた名残ということが言えるのかもしれない。

何も考えなくて良かった。

子どもは、総じて外で遊ぶものであった。大草の方の池や田んぼでカエルやザリガニを取ったり、秘密基地をつくったり、神社でボール遊びをしたり、みんな大したおもちゃなど持っていなかったが、持て余すことなく1日が過ぎていった。小学校の近くには、子ども相手の駄菓子屋があって、シヨッ

店がほぼ揃っている、極めて健全な町であった。肉屋、魚屋、八百屋、酒屋、花屋、和菓子屋、呉服屋、靴屋、電気屋、家具屋、文房具屋、本屋、写真店、喫茶店、パチンコ屋、おしゃれなケーキ屋さんも、駅前にできた。通っていた大野小学校は、どの学年も2クラス以上あって、子どもの数からしても健康的であったように思う。特徴があるかと言えば、周辺の町と比べて栄えているというわけでもなく、知多半島のどこにでもある海沿いの町になっていた。

無理に特徴を挙げるならば、寺院が多かった。わずか3000人ほどしか住んでいない町に10社ほどあったのであるから、それぞれ檀家を持っているとして、あれこれのお付き合いが大変だったのではないかと。また、どのようなお

キングカラーの怪しげなお菓子やおもちゃのほかに、安い料金で腹ペコのお腹を満たすお好み焼きや大判焼きを提供してくれていた。

中学生の頃だっただろうか。東海市太田川に「西川屋」（後のユニー・ピアゴ）ができた。欲しいものが何でも揃う総合スーパーは、田舎の子どもらにとってインパクトがあつて、片道10kmもあろうかという道のりを自転車で辿り、4階か5階かにあった「寿がきや」でラーメンを食べるのが楽しみだった。

思えば、存分に大人がほつたらかしくしてくれていたと思う。今と比べ、外遊びが安全だったかといえど、そうでもなかったのではないかと。昭和40年代以降、交通事故死は年々増え続け、その状況は「交通戦争」と呼ばれていた。



路地の交差には一時停止を喚起するための足跡が描かれ、自転車に乗る時は必ずヘルメットをかぶらされはしたが、この辺りの子どもらは大人の目を気にすることなく、将来のことなどは何も考えず、自由気ままに走り回っていた。

変わろうとしなかった町。

それでは、大人たちは何を思い、暮らしていたのだろう。旧くは大いに栄えていたけれど、変わりゆく時代の流れについていけず、乗り遅れた町。その流れを感じずにはいられなかったにもかかわらず、徐々に打つ手を失っていった。昔のように観光地として注目してもらうのか、それとも名古屋からのアクセスの良さを利用して、ベッドタウンとして売り込んでいくのか・・・そのどっちにも動けな

った。

ところで、前述したウィンドサーフィンの流行は、この町に何かをもたらしたのだろうか。浜の向こう側で黒い肌をした若者たちが興じているマリンスポーツに対し、町の大人たちは白い目を向けていた気がする。

確かに一時的なブームであったし、一部の若者の間で流行っていたに過ぎなかったのかもしれないが、そもそも湘南の風をこの町に吹かせて盛り上げようなどという発想は、持ち合わせていなかったのだろうと思う。

一方で、何軒かのマンションが相次いで建った時期があったが、狭い上、住居や商店が密集した町なので、まとまった住宅地を確保できるような場所があるわけでもなく、不動産の動きも中途半端に

終わった。

父の時代の当たり前。

昭和4年生まれの子であるから、戦前の一時期と戦後、大いに違った頃の町の様子を聞くことが

できるはずである。子どもの頃から幾度となく聞かされた話も聞かされることを覚悟しつつ。

戦前生まれの父の話は、戦中の話に寄りざるをえない。戦時へ向かう流れの中で、軍国少年に突き進むしかなかったようである。それが当たり前であるのだから、なんで？などという疑問の余地は、存在しない。どれだけ厳しい生活であったか、学校教育の理不尽な様子・・・誰其れという先生には、随分無茶な指導をされたなどという話題になった。そして、予科練への志願とそこでの体験。具体的には書かないが、今とまったく常識が違う時代の話であり、何度聞かされても共感することができない。

戦後の大野町の様子はどうだったのか。過去の価値観が覆されよ



うとも、社会が変わろうとも、生き残った者たちは食っていかなければならぬ。そんな時代の中に生きていた。父は祖父の口利きで、大工の道を選んだようだ。復興に向かう中で、大工の仕事は引く手数多になるといふ狙いがあったのだらう。名古屋の何とかという頭領の下で働きながら、厳しく修行するわけであるが、仕事にあぶれることはないと考え、段取りをひと通り覚える前に独立したため、その後苦勞をしたという。

さて、大野町の様子はどうかだったのか。なかなか話が進んでいかない。「誰其れがこんな商売をはじめて、うまくやった」などという話が多かった。食うことが先決であった頃、自分のことで精いっぱい、町のことなど知ったこっちゃなかったとも言える。長い間、禁欲

的な生活を強いられていた人々は、物資不足で厳しい暮らしに耐えながら、自由に仕事ができる時代へと解き放たれていった。そんな空気の中、空襲を免れていたこの町の人々は、それぞれの持ち場で競うように力を発揮し、近隣から客を集める保養地としてあつという間に復活を遂げたのである。客筋



は、その時代にそういう贅沢なことができない旦那衆が多く、この地での過ごし方も今より優雅な雰囲気は漂わせていたそうだ。大げさに話す癖のある父であるが、その頃の話は多分、真実に近いのだらうと思う。

海が富をもたらした。

あれこれ話を聞いたり、調べたりしても、疑問が残ることがある。知多半島には数々の海沿いの町があるのに、どのような理由を持って大野町に「富」が集中したのか。近代、海水浴場として栄えた理由は明快に説明できそうだ。もともと温暖な気候にあった知多半島にあって江戸期から保養地として人を集めていたところに、明治45年、愛知鉄道（現名古屋鉄道）が大野町まで鉄道を開通させること

で、保養地として開発されていったのである。

さらに歴史を紐解くと、鎌倉時代からこの町は栄えていたようである。中世まで遡ってしまつと、その理由は軍事戦略的なものにならざるをえない。下記は、ウィキペディアから拾った一節だ。

観応年間（一三五〇年）頃に三河国守護の一色範氏が知多半島に勢力を伸ばし、その子一色範光が伊勢湾を見下ろすこの城を築き、大野湊を中心とした伊勢湾の海運を手中に収める。

ひと言でいえば、支配者にとってみれば都合の良いロケーションであったということか。「伊勢湾を見下ろす」とは、大野城のあった青海山のことを指しているようであるが、戦時の武将にとってあの場所がどのように魅力的だったのか



らうか。海運に重きがおかれていた時代に、伊勢湾上に付き出していた知多半島は、中継地として都合の良い場所であることは理解できる。それでは、なぜ大野の疑問は残る。調べてみたけれど、ゆるやかな丘陵が続く知多半島の中にあ

って、大野湊は三河方面から伊勢へと向かうちょうど道筋に位置していたということくらいしか、手掛かりは見つからなかった。

路地を歩くのが楽しい。

さて、今はどうであろうか。大野町駅を降ると、人通りも開いている店もまばらで、閑散としている。「世界最古の海水浴場」の看板だけが変に威張っていて、何だかちょっと怪しくもある。少し前にぎやかな町の様子を知っている人からすると、浦島太郎になった気分になる。

ところが、この時代の流れから置き去りにされたような空間が、もてはやされている。繁栄の痕跡があちこちに散らばっていて、現代的な感覚からすると、無駄とも思えるような贅沢な意匠が商店や

民家に施されていたりする。黒っぽくて細い迷路のような路地は潮の香りが染み付いていて、川沿いをたどると、ノスタルジックな期待感とともに視界が広がる海へと出られる。その感覚がとても楽しいのだ。

大野町には、他に負けてない奥深い歴史があるのに加えて、名古屋から近いにもかかわらず、海という豊かな自然がある。地元の人々にとってみれば当たり前広がる海であるが、これは相当あり難いことなのだ。僕は今、埼玉県山辺に住んでいる。埼玉は海なし県なので、遊泳できるような海までたどり着くには、高速を車で走っても結構な時間がかかる。海のないうち地域からすると、海が持っているオープンなイメージはうらやましく感じるものだ。

辺のイメージが濃厚で、「マリリンパーク」、「オーシャンコースト」といったカタカナを使って街づくりを展開している。また、風力発電の風車が立ち並んでいて、エコな雰囲気があるも、時代の波に乗っている感じがする。

残念ながら、大野町の方はこうした新しい感覚は似合わなさそうだが、新舞子がエータタウンだとすると、大野町は旧市街地という言葉の方がふさわしいだろう。でも、旧市街地って悪くないと思う。観光地の見どころは、どこだって、世界遺産の町であつても、旧市街地にある。

観光客からすると、市町村の区分は関係がないわけだから、いろいろあつた方が楽しいに決まっている。新舞子がお洒落でアツケラカンとしたカタカナ文化を身にま

カフェーが似合う旧市街地

今、歴史と海の恵みにあふれた知多半島は、観光による地域おこしのターゲットとなっている。大野町は小さな町ではあるのだが、そのなかで存在感を発揮できる要素は多分にあるような気がする。

「昭和の町」であるとか「大正村」と銘打って、売り込もうとする地域もあるが、大野という町は、それだけでは説明できない歴史を有している。大河ドラマに登場した「お江」ゆかりの地としても名が知れたし、徳川家ともつながりが深かった町である。僕がキャッチフレーズを付けるなら、「海辺のハイカラ町（タウン）」といったところかなあ。

海岸のつながりというと、市内よりも知多市新舞子が近い関係にある。新舞子は名前からして浜

とうのなら、大野町は漢字とカタカナ併記の大正ロマンな香りを漂わせてはどうか。その昔、カフェーで出されていた品物を提供できたら、人気メニューになりそうではないか。



父・元喜（左）と、昔の大野町の写真（P7/8）をご提供いただいた権田正さん。ご協力感謝します。

おのまち六景



少し歩くと、この町が背伸びしていた頃のハイカラな風情を見つけることができます。



OONOSTALGIE

発行：いしいデザイン 石井 茂

協力：大野コミュニティ

大野町は市の北域にあり、僕が住んでいた高須賀は、そのまた北端にあった。地面を1メートルほど掘ると、砂地が出てくるような土地柄で、夏になると道端をのこのこと蟹が歩いていた。